

---

# 魔法少女リリカルなのはSword

遠坂 士郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSword

### 【Nコード】

N5019X

### 【作者名】

遠坂 士郎

### 【あらすじ】

これは衛宮士郎がオリキャラを連れてリリカルワールドへ行き、そこで幸せについて考えるお話です。

## プロローグ（前書き）

この話にはクロスオーバー・オリキャラ・独自解釈・ご都合主義・処女作・主人公最強・ハーレム？などの要素がございます。ご注意ください。

逆にアンチ管理局・オリ主・転生・憑依等は含みません。

なお、作者は様々なリリなの×Fate系小説に影響されているため皆さんがご存知、もしくは執筆された設定、場面等があるかも知れませんが。

ご了承ください。

## プロローグ

「ふぁー…………おはよー、お兄ちゃん…………。」

「おはよう優菜。もう少しで朝食ができるから今のうちに顔を洗って来るといい。」

朝食を作りながら、まだ眠そうな妹・衛宮優菜に挨拶を返す私こと衛宮士郎。

「忘れ物は無いか？弁当はいれたな。」

「うん！」

と数十分前とは打って変わって元気に返事をする優菜。

「それでは出るとしようか。そろそろ行かねばバスの時間に遅れてしまうからな。」

「はいー！」

この二人は私立聖祥大附属小学校に通う小学三年生と一年生だ。

「おはよう士郎君、優菜ちゃん。」

「今から学校かい？」

同じアパートに住む老夫婦だ。今から仲良く日課の散歩からへ行くのだろう。二人とも動きやすそうなジャージを着ている。

「おはようございます(！)」

そういつて駆けていく二人を見届けながら、老夫婦は

「二人とも本当に元気ねえ。」

「全くだ。優菜ちゃんもここに来たばかりの時はふさぎ込んでいたけど、今じゃすっかり明るくなって……やっぱり学校に行かせたのは正解だったなあ。」

「そうですねえ。」

そんなことを話しながら二人はゆっくりとその歩を進めた。

さて、今度はところ変わって私立聖祥大附属小学校に向かうバスの中、

「あ、士郎くん！優菜ちゃん！」

「おはよう、二人とも。」

「相変わらず仲が良いわねー」

挨拶(?)してきたのは士郎のクラスメイトである高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスである。

「おはよう。三人とも今日も元気そうで何よりだ。」

「おはよう！なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん！」

衛宮兄妹も挨拶を返す。

「そういえば士郎、宿題だった算数のプリントやった？」

「えっ…そんなのあったっけ？」

「なのは…もしかして忘れたのか？」

「なのはちゃんってたまにそんなドジするよねー」

「大丈夫？学校着いたら見せてあげようか？」

そんな雑談をしているうちにバスは走り出す。  
目的地に向けて加速する。

こうしていつもと同じ一日が始まった。

## プロローグ（後書き）

初めまして。

遠坂 士郎です。

今までずっと読者専門だったのですが、最近こちらのサイトに登録したのをきっかけに自分も書いてみようと思いい立ち、今に至ります。

先ずは日常と思わせぶりな事を書いてみました。

今回はキャラ設定などを公開する予定ですが、二人の詳しい過去はまた本編で書く予定なので少々お待ち下さい。

また、思いつきで始めた小説なので不定期更新だったり、煮詰まって書けなくなったり、過去に書いたことと矛盾する描写があるかも知れませんが、それをご理解の上で作者お付き合い下さい。

解説や改善した方が良い点があればどんどん感想の方に書いてください。

これからよろしく願います。

## キャラ設定（前書き）

前回書いた通りキャラ設定などを載せます。



## キャラ設定

衛宮 士郎 (9)

hollowのように原作のどのルートでも存在しないとある平行世界に存在する衛宮士郎の姿の一つ。

世界との契約は結んでいないため、その実力は英霊には及ばないが、ただの人間の戦闘者としてはかなりのもの。しかし、リリカルワールドに来る際に、年齢が七歳に退行したことによって、筋力なども相応に落ちてしまった。また、年齢退行に伴いアーチャーと同じ外見だったのが元に戻り、現在はまさしく衛宮士郎九歳当時の姿。

また、世界との契約を結んでいないのでその理想はまだ摩耗しきることなく残っていたが、優菜を育てる事になって人を幸せにする為には自らも幸せを知らなくてはならないと考えるようになった。その結果、今有る日常のなかで、自分の周りの人間が笑顔である事が自らの幸福に繋がると考えた。二年前のとある事件をきっかけに優菜を幸せにする事を誓う。優菜からはお兄ちゃんと呼ばれてはいるが、その実年齢(29)や主夫っぷりも相まって、実質的には兄よりも父親に近い。

基本的に口調は弓兵と同じだが、学校などでは年相応の話し方をするよう心掛けている。

衛宮（澪標） 優菜 （7）

二年前の事件の際に母親である澪標志保を亡くして以来、士郎に育てられている。魔術師の家系に生まれ、その魔力量は遠坂凜や高町なのは程では無いが、かなりのもの。

しかし、兄（士郎ではない）がおり、彼が家を継ぐはずだった。魔術については士郎から教わった最低限の知識と魔術回路の運用法くらいしか知らないため、実際に魔術を使う事はできず、せいぜい一部の魔術礼装を使用することぐらい。

リリカルワールドに来たばかりの頃は母親の澪標 志保が死んだショックから立ち直り切れていなかったが、士郎や老夫婦等の努力の甲斐があり、今ではその明るく天真爛漫な性格からご近所の人気者となっている。

しかし、まだ完全に心の傷が癒えた訳ではなく、家族を傷付ける者には過剰に反応する。

士郎と平和に暮らしていく事ができればそれでいいと考えているが、同時に自分がいては士郎が自分の理想を追うことが出来ないとも思っている。

澪標 志保 （享年32）

元々魔術とは無関係の一般人だったが、結婚してから夫が魔術師であることを知る。その後子供を二人作る。

優菜が魔術実験の材料として使われる事を知り、優菜を連れて海外に逃亡する。そこで衛宮士郎と出会い、彼を追って来た封印指定の

魔術師の攻撃で命を落とす。その際に、優菜を士郎に託す。

自分は家族を誰も幸せに出来なかったのではないかと、家を出てからもずっと悩んでいた。

桂夫妻（共に77）

士郎達の生活するアパートの管理人。

士郎達の世話を焼く過程で、かなりのお金を使っているはずだが平然としていたり、私立聖祥大附属小学校の理事長と知り合いだったり、普通に考えればかなりの大物のだが、何故かこじんまりとしたアパート（築40年）を格安で経営しながら生活している。本人達曰く、老後の楽しみ。実はこのアパート、貧乏学生には人気の物件。

この二人の存在は二番目に不思議な謎である。

当然一番は、リリなの原作のお母さんズの異常な若さの謎。

## キャラ設定（後書き）

とまあ今（2011・10・11現在）はこんな感じですが、必要に応じて書き足していくつもりです。

遷標 志保を更新しました。（2011・10・12）

勝手ながら、衛宮 士郎等に関するいくつかの事柄を変更させていただきました。（2011・10・13）

桂夫妻を追記しました。（2011・10・24）

第・1話 終わりの慟哭（前書き）

とりあえず以前言っていた過去編です。

どしどし。

## 第・1話 終わりの慟哭

ここはある国のある街にある小さな貸家。

私はこの付近で紛争が勃発したとの情報を元により詳細な情報を知るために比較的安価な貸家を一ツ借りて、そこを拠点にしばらくここに滞在している。

しかし、封印指定を受けているので余り長居をすべきではないし、必要な情報もそろいつつあるので、後数日中にはこの街を出るつもりだ。

現在の時刻はちょうど十二時とどの家庭でも昼食時であろう時間帯だ。

本来、私の昼食はもっと遅くに食べるのだが、今日ばかりは私も例外ではない。私は出来た料理を、テーブルに並べていた。とそこへ、

ピンポン

と家のチャイムがなった。きっと今日の客人が来たのだろう。そう思ってドアを開けると、

「お兄ちゃん」

私の腰に少女が飛び込んで来た。

「こら優菜。おとなしくしなさい。土郎さん、お邪魔します。」

ドアの前には、今度は私より少し年上であろう女性が立っていた。

「二人とも良く来てくれた。さあ、上がると良い。ちょうど昼食の

用意が出来たところだ。それと優菜、誕生日おめでとう。これは私からのプレゼントだ。」

そういうと私は二人の客人　　漣標志保と漣標優菜を家に招き入れて、優菜に小さな箱を渡した。

二人はこの家の近所に住んでいる日本人の母子だ。彼女達とは私がここに越してきて街の地形等を把握するために歩き回っていると、優菜が車に轢かれそうになっていた所を発見し、助けた時に知り合った。家が近所だというのもその時お礼だと言って強引に彼女達の家に関連して行かれて、夕飯をご馳走になって知った。

志保は魔術師の家系に嫁いだ一般人の女性で、生れつき魔力量の多かった優菜が魔術実験の材料として使われそうになったため、優菜を連れてここまで逃げて来たらしい。

実際、優菜の魔力量はかなりのものだ。しかし、余り魔力の感知が得意ではない私ですら特に意識せずとも魔力を感じるのだから、このままでは他の魔術師達に狙われるのも時間の問題だ。

そんな事を考えていた矢先に今日が優菜の誕生日だと聞いて、昼食に招待すると共に以前遠坂から貰った魔力殺しのアミュレットを投影してプレゼントすることにした。

「ありがとうお兄ちゃん。中を見てもいい？」

「ああ。開けてみるといい。」

「うんー！」

優菜はすぐさま包装を破り捨てて箱を開けた。

「わーきれー！ありがとう、お兄ちゃん！」

「ああ。喜んで貰えたようで何よりだ。」

優菜はひとしきりアミュレットを眺めるとそれを私に差し出して

「お兄ちゃん、着けて！」

と言ってきた。

「わかった。」

着けてみるとサイズもピッタリのようで安心した。

「よかったわね優菜。」

「うん！」

「さて、それではそろそろ昼食としよう。せっかくの料理が冷めてしまっ。」

そうして私達は食卓に着いた。

「お兄ちゃん、今日は一緒に遊んでくれる？」

「ああ。」

「よろしいんですか？士郎さんもお忙しいでしょう？」

「もちろんだ。今日はそのために君達を家に招待したのだから。」



「そうですか？……………それならお願いしちゃうかしら。」

「了解した。それでは優菜、何をしようか。」

そして、私と優菜は外に出てしばらく遊んでいた。志保はその間お茶を飲みながら、本を読んでいた。

「む、あれは……………」

ふと空を見上げると、爆撃機が飛んでいるのが見えた。だが、型からしてこの辺りを攻撃して来る事はないだろう。そう思っって少し優菜と街を歩いていると、

ドゴン！ドゴン！

先程の爆撃機がいきなり爆撃を始めた。何故だ？ここにはあの爆撃機を所有している陣営の支持者も多数存在しているこの辺りを攻撃してもなんのメリットも無いはずだが……………

「ねえお兄ちゃん……………。お家……………大丈夫かな……………？」

優菜のその言葉を聞いて、私は急に嫌な予感がした。

いくつもの倒壊した家屋を横目に、急いで帰ってみると案の定、瓦礫の山と化した私の家と　　血に塗れ伏した遷標志保の姿があっ

た。

「いやああああああ！……お母さああああん！……！」

優菜が泣き叫ぶ声が響き渡る。

私達はすぐさま志保に駆け寄った。

「ゆ……………な……………」

志保の口が動く。

「志保！しっかりしろ！今手当する！……」

私はすぐにアヴァロンを取り出し、志保に持たせる。そして瓦礫の中から包帯を探しだして志保に巻く。

しかし出血が酷く、セイバーのいないこの状況ではアヴァロンもあり意味がない。このままでは彼女は……………

「しろ……………さん……………お願い……………」

「何だ。」

「ゆう……………な……………を……………ど……………つか……………しあわ……………せ……………に……………」

「……………ああ、わかった。彼女は私が責任を持って幸せにすることを誓おう。」

「お母さん！……お母さん！……」

未だ母を呼ぶ優菜。

「ゆ……………う……………な……………ごめん……………ね……………ゆう……………」

そして彼女は事切れた。

「お母さん……………嘘……………ダメ……………いや……………いやあああああ  
あああああああ……！」

再び彼女の絶叫が響く。

私はただそこに立ち尽くすことしか出来なかった。

## 第・1話 終わりの慟哭（後書き）

さて……………ここからどうしようか……………

とりあえず今回はここまでです。

今回出て来た二人目のオリキャラ、澁標志保はキャラ設定に載せて置きます。

次回はテンプレ展開に必須で作者が一番好きなあの人が出てきます。

ちなみに、もしかすると次回は現在の状況から変えるためにグダグダ感の溢れる話になってしまいかも知れませんが、そうなってしまっても、どうかご容赦下さい。

ではでは

続・第・1話 始まりの一闪(前書き)

- 1話で書ききれなかった分です。

.....あれ？こっちのが文字数多い？

## 続・第・1話 始まりの一閃

しばらく家の瓦礫前で立ち尽くしていると、どこからか懐かしい声が聞こえて来た。

「士郎!」

「!この声は…」

振り向くと、そこには数年前にロンドンで別れて以来、一度も会うことのなかった戦友　遠坂凜が、かなりの量の荷物を持って、こちらに走って来ていた。

「遠坂!どうしたのだね、こんな所で?」

「ぜえ……はあ……ふう」

息を整えると、

「どうしたのだね?じゃないわよ!!置き手紙に『ありがとう』とだけ書いていきなりいなくなっと思ったたら次に生存が確認出来た時には封印指定されてたり犯罪者になってたりってあんた一体どういうつもりよ!それでやっと居場所がわかって助けに来てやったら今度は封印指定の執行者にギアスをかけられたパイロットに爆撃されているし、あんたはあいつみたいになってるし!どうせあんたの事だからこのまま無料奉仕の救助活動でもしてどっか行くつもりだったんでしょ!?ちよつとは探しているこつちの身にもなりなさいよね!」

一気に言い切った。

なるほど、あの爆撃機は封印指定の執行者の仕業だったのか。確かに本来なら爆撃が起きた時間に私は自宅で食事を摂っているはずだが、今日は優菜達に合わせていつもより早く食事を終えてしまった。また、毒を盛られる可能性を考慮して普段は全くを外食をしないのも今回はかりは仇となつてしまった様だ。

ところで助けに来たというのはどういう事だろう？

だが、そのことを尋ねる前に

「全く……で？そつちで泣いてる娘は？」

と尋ねられた。

私は澪標母子との関係と先程起こった事を話した。

「ふーん……なるほどねー。それで、子供を託された太郎はこれから一体どうするつもりなのかしら？」

「無論、誓いは果たす。とは言え先程君が言った様に、私は表では犯罪者、裏では封印指定の魔術師だ。何より私は子育てなどやったことはない。正直な所を言えば、彼女をまともに育てられる自信がない。」

「……………そう。それなら私が少し助けてあげる。」

「助ける？さっきも言っていたがそれは一体どういう事だ？」

「どうもどうもそのままの意味よ。とりあえず今はあの子を何とかして会話出来るようにさせなきゃね。」

そついうと遠坂はおもむろに優菜の方に歩いて行った。

「言つとくけど今からあの子に言うことを聞いたら殴つ血k i l l  
からね。」

その声はまさしく、あかいあくまの物だった。

遠坂はへたり込んでいる優菜の隣にしゃがむと、その肩を抱きながら彼女に何かを耳打ちした。すると、ずっと嗚咽をあげていた優菜がゆっくりと顔を上げた。それから少しの間二人きりで何かを話していたが、音声遮断の魔術を使っているらしく、その話しが私の元へ聞こえて来る事は無かった。

そして、二人で立ち上がると、手を繋いでこちらに歩いてきた。

「ほう、これはすごいな。良ければ後学のためになんと云ったのか教えてくれないか？」

「な……………ダメよダメ！乙女の秘密何だから！」

む……………そう言われると余計気になるが、ここは深く突っ込まない方が身のためなのは冬木で学習済みだ。

「そ、そんなことよりさっき言つた通り、あんたは犯罪者だったり封印指定だったりと色々とやりすぎて、この世界に居場所を無くしてしまった。まあ自業自得ではあるんだけど、これはあんたが一番良くわかつてるわね。」

「ああ。」

その事は今回、痛いくらいハッキリと再認識させられた。

「なら、あなたはどうしたら居場所を作る事が出来るかしら？」



?.....おかしな事を言う。

その居場所がこの世界の何処にも無いとさっき話したばかりなのに、何故そんなことを聞くのだろうか？

「.....どうやらわからないようね。じゃあ教えてあげる。」

と言って遠坂は持っていた荷物のうち、一番小さな鞆から取り出したものは

「魔術師の基本、無いなら別の場所から持って来るよ。」

### 宝石剣ゼルレツチ

「とどのつまり、この世界に居場所が無いんなら、別の世界で作れば良いって事よ。とは言っても、ここじゃ人目が有りすぎるし他の準備も必要だから、このあたりに何処か人気の無いところはない？そこで今晚夜中の2時に始めるから遅れずに来なさい。」

そう言うと、今度は別の鞆からペンと便箋を取り出して、

「後、これ。最期になるんだから世話になった人達に手紙でも書いて置きなさい。桜とか藤村先生とか、心配してる人、いっぱいいたわよ。私が届けてあげるから、ちゃんと書きなさいよ。」

「ああ、わかった。何から何まですまないな、残念ながら恩返しをすることは叶いそうに無いが、ありがとう。それと、人気の無い所ならここから11km程東へ行けば廃工場があるからそこを使うといい。」

「…………別に良いわよ。今回の事は大師父の宝石剣の投影品のお礼と私が作った宝石剣の実験みたいな物だし。」

そついつて俯きながら顔を背ける遠坂。

大師父の宝石剣の投影品とは、私が遠坂と共にロンドンの時計塔に居た時に、気まぐれで私達の元を訪ねてきた死徒二十七祖が一人（？）にして第二魔法の使い手であるキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ氏がこれまた気まぐれで見せてくれた宝石剣を投影した所、完成度二割にも満たないような粗悪品が出来上がったのだ。そんなものでも、研究すれば今後はかなりの進歩が望めるらしいので、プレゼントしたのだ。（本物は本当に見せるだけだった）

「ほう、完成したのか？」

「いいえ。まだ未完成よ。詳しい事はまた後で話すけど、士郎と優菜ちゃんを平行世界に飛ばす事くらいなら出来るはずだから安心しなさい。じゃあ私は準備があるからそろそろ行くわね。1時位には来なさい。いいわね？」

それだけ言い残すと、遠坂は廃工場の方へ向かって行った。

「やれやれ、こういう所だけは変わらないな。」

と呆れて見せるものの内心は少し嬉しかったりもする。

「さて、優菜。志保を火葬しようと思うのだが、かまわないかね？ああ、ちなみに火葬とは彼女の死体を燃やすということだ。」

酷な質問だと思う。しかし、私は敢えて聞く。

いくら遠坂のおかげで最低限、会話の出来る精神状態になったとしても、彼女はまだ5歳で、目の前で母親を亡くしているのだ。平気

なはずが無い。れでも、今これをしておかなければ彼女はいつか後悔してしまうだろう。

「……………うん。……………おねがい、お兄ちゃん……………。……………ずっとあのままじゃお母さんがかわいそうだもんね。きちんとおそうじきしてあげないと。」

どうやら彼女は私が考えていた以上に聡く優しい子らしい。

私はクシャクシャと優菜の頭を一通り撫でてやってから、地面に魔法陣を描いた。そして、瓦礫の上に転がっている志保をそっと抱き上げてそこに置くと、申し訳程度に近くに咲いていた花を摘んで持たせた。

顔に付着した泥や血を拭ってから、私は志保を囲む様に黒鍵を魔法陣に突き立てた。

「火葬式典。」

志保は灰も残らず燃え尽きた。

優菜を見ると、彼女は聖母の様に膝まずいて祈りを捧げていた。

志保の葬式が終わった後は、荷造りをした。

優菜達が住んでいた家は被害を免れたらしく無傷だったので、家が上がって荷造りを始めた。とは言え、私の場合私物はリュックサック一つで事足り程度の荷物しか持っていないし、優菜もまだ幼いので必要な物は少なく、精々服を数着だ。それと保存の効く食べ物に

貴金属をいくつか拝借した。貴金属ならどのような場所でもそこそこの金額で売ることが出来る。そして以前私と志保と優菜の三人で撮った写真を持って、荷造りは完了した。

荷造りが終わると今度は手紙を書くことにした。桜、藤ねえ、イリヤ、一成、慎二、美綴等、お世話になった人達を一人一人思い出しながら、もう二度と会えなくなる人達に手紙を書いていると、遺書でも書いている様な気分になる。

私が手紙を書いている間、優菜は部屋の隅でうずくまって座っていた。

そんな優菜を横目に見ながら、私は最後の人物に宛てた手紙を書き終えた。

手紙を書き終えることができなくなり、優菜に気になっていた事を尋ねた。

「そつえば優菜、あの時遠坂は君になんと言ったのかね？」

あの時は遠坂にはぐらかされたが、実はひそかに気になっていたの

だ。

「えーっとねえ……………おねがいされたの。」

「お願い？」

「一体どんなお願いをしたのだろうか？」

「うん。あのね、お兄ちゃんは何の人を守ってばかりで自分の事になると全然大切に出来ない大莫伽者だから私がお兄ちゃんを守ってあげてって言われたの」

「そんなことを言われていたのか……………」

「とは言え結果として優菜が落ち着いたから良いのだが、どうにも複雑だ。」

そして遂に約束の時間は来た。

廃工場に入ると、遠坂の足元に魔法陣が描かれて居て、その周りに彼女が持つて来たらしい魔術器具とそれが入っていたのだろう開いた鞆の数々。そして小さめのトランク程の大きさの閉じている鞆が一つ置いてある。

「来たわね。 土郎、優菜ちゃん。」

「ああ。」

「うん……………」

夜中ということもあり、優菜は眠そうだ。

「じゃあ説明に入るわね。まずこの宝石剣だけど、どうせ難しい事はあなたには理解出来ないだろうからかみ砕いて言うと、これは二年前から作っている未完成の試作品よ。それでも去年から同時進行で進めていた宝石剣の効果を増幅する為の魔法陣と併用することであなたたちを平行世界に飛ばす事位は可能よ。ただ一つだけ問題があるの。」

「ふむ。それは？」

「……………まだ未完成だからうまく制御が出来ないの。だから、とりあえず人間がいる世界の何処かに飛ばす事は出来るだろうけど、どんな世界に行き着くかは完全に未知数。もしかすると、人間はいるけどこの世界の人間とは別の、より過酷な環境で生き抜く事に特化した人間であなたたちは生きていけないような世界に出るかも知れないの。それでもいい？」

「無論だ。どの道私はこの世界では生きていけないのだから、これに賭けるしか生き延びる術はあるまい。優菜はどうだ？」

「ん……………私はお兄ちゃんと一緒にいるー。」

「……………だそうだ。遠坂、頼む。」

「……………わかったわ。じゃあこれは私からの餞別よ。受けとって。」

遠坂は閉じている鞆を私に手渡した。

「手紙を預かるから出してちょうだい。」

「わかった。」

懐から手紙を渡すと何故か急に胸が寂しくなった気がする。

「後、これを。」

「まだあったの？面倒臭いから一気に出しなさいよね。」

「いや、これは君に宛てた手紙だ。」

遠坂が面食らった様に動きを止めた。

「何を驚いているのだね？世話になった人達に手紙を書けと言ったのは君だろうに。」

世話になったと言うのなら誰よりも一番世話になったのは遠坂だろう。今思えばよくもまあ私のような愚か者に付き合ってくれていたものだ。

「……………そう……………そうよね……………私も我ながらよくあんたみたいなものの世話をしたものだね。」

私からの手紙を受け取ると、壊れ物を扱うようにゆっくりと手紙を胸に抱いた。

「もう……………どうしてくれんのよ……………せっかく泣かずに……………優

雅に別れようと思ったのに……………泣いちゃったじゃない……………」  
俯いた顔から滴がこぼれ落ちる。

「参ったな……………泣かせるつもりは無かったんだ。」

さて、どうしたものか……………。  
と、その時ふとある言葉が頭に浮かんだ。

「大丈夫だよ、遠坂。」

それはこことは違う世界において、弓の英霊が誓った言葉。

「俺も頑張っ て行くから。」

そう。これもまた、誓いの言葉。

「……………うん、わかった。その言葉、絶対忘れんじやないわよ。」

「ああ、わかった。」

みるみるうちに宝石剣と魔法陣に魔力が溜まって行く。これならあと三十秒もしないうちに私達はこの世界から消えるだろう。

「お姉ちゃん、バイバイ。」

「ええ、さようなら優菜ちゃん。じゃ、土郎行くわよ。」

「言っておくがいつものうっかり（呪い）を発動させないようにな。」

「



「心配せずとも、去年から既に克服済みよ。」

「そうか。それはよかった。機械とその呪いだけが君の数少ない弱点だったからな。その調子で頑張って機械も克服してくれ。」

「そうね、気が向いたらそうするわ。」

最後にそう言って笑いあった。

「さあ。そろそろよ士郎。」

「ああ。」

その瞬間、昏の遠坂との会話を思い出した。確か宝石剣を作り始めたのは二年前だと言っていた。そしてうっかりを克服したのは去年だと言った。

その思考に思い至った時、

「あれ？宝石剣の出力が……………」

「お、おい、待て遠さ……………」

「このままだと孔がけいさんより小さく……………えーいそのまま行っちゃえー……………」

「な……………」

斬撃によってできた孔に飲み込まれながら、私は数年振りに私にとつての理不尽の象徴のようなあの口癖を口にする。

「なごびね……………」

「うして、衛宮士郎と澁標優菜は運命の地へと至る。」

続・第・1話 始まりの一閃(後書き)

何だこのggdgd感…………orz

一応言っておくと、士郎がアーチャー口調なのに遠坂と呼んでるのは仕様です。

ということとで作者の心の人気投票ランキング総合一位、うっかりあくまの遠坂凜さんの初登場にして最後の出番でした。

ちなみに二位はアーチャーさんです。

えっ？ベストカップル？士×凜に決まってるでしょう？

いやーしかしやっぱり遠坂さんの第二魔法によるベタベタテンプレ展開になりましたねー

これでリリカルワールド突入な訳ですが、またもここからどうしようOTL

もししばらく更新されなくなっても愚かな作者をどうか見捨てないでやってくださいm(´`´´)m

## 第0話 許し・戸惑いの異世界（前書き）

投稿が大分遅れました。すみません。

実はこの前までテスト週間で部活もなく、勉強（執筆）する時間をたくさん取れたのですが、テストが終わって逆に時間が無くなってしまいました。今後も執筆に時間がかかるようになってしまつてしまうので、どうかこれからも暖かいめで見守って頂ければ幸いです。

何とかリリカルワールドにて第0話を書き上げました。

しかしどうしてもggdgd感が無くならない。どうしたらggdgdる事無く書けるの？教えて巧い人。

## 第0話 許し・戸惑いの異世界

宝石剣の斬撃に呑まれた後、私は激しい痛みに襲われた。

何時からそれを感じていたのかはわからない。

呑まれた直後だったかもしれないし、何時間もたってからだったかもしれない。

いや、そもそもあの空間に時間という概念があるかどうかも怪しい。

ただ覚えている事といえば、

それは切られる様な

それは刺される様な

それは抉られる様な

それは削られる様な

それは溶かされる様な

それは潰される様な

そんな痛みだった。

その痛みを感じた瞬間、私は思わず近くに居た優菜を抱きしめた。そして、彼女の気持ちよさそうな寝顔を確認すると、私は意識を手放した。

夢を見ている。

夜、立派な日本家屋の縁側で、赤銅色の髪の毛の少年 衛宮  
士郎と、まるで疲れきった老人の様にも見える若い男 衛宮切  
嗣が、満月を眺めながら話していた。

「子供の頃、正義の味方に憧れていたんだ。」

そう、これは夢。

「何だよそれ。憧れたって、諦めたのかよ。」

私（空の杯）に理想（中身）が与えら（注が）れた日の記憶。

「うん。残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなこと、もっと早くに気がつけばよかった。」

衛宮切嗣と共に過ごした最期の思い出。

「そっか。なら、仕方ないな。」

思えば、衛宮士郎が本当の意味で生まれたのはこの時だったのかも  
しれない。

「ああ。本当に仕方ない。」

そして、私は誓いを立てる（呪いにかかる）。

「うん、しょうがないから俺が代わりになってやるよ。爺さんは大

人だから無理だけど、俺なら大丈夫だろ。」

だが、ここで私の記憶と夢が食い違う（分岐する）。

「いや。もう十分だよ、土郎。君はよくやってくれた。通った道は僕と同じだけど、君はけして折れることなくここまで来た。君がこの無垢な理想を守り、貫いてくれただけで僕は満足だ。だからもう君は君の為に、君の大事な人の為に生きて欲しい。僕もかつては多くの命を奪い、多くの人を不幸にして来た。だけど、そんな僕でも幸せな時間を過ごす事が出来たんだ。なら、君が幸せになっちゃいけない道理なんて何処にもない。土郎、どうか君も幸せになっほしい。それが、それだけが今の僕の夢だ。」

そして私は許された（救われた）。

同時に新たな誓いを立てる。

「まかせろって。爺さんの夢は俺が、ちゃんと形にしてやるから。」

私はあの時言えなかった言葉を伝えると、

「ああ、安心した。」

親父は幸せそうに微笑んだ。

目覚めると、私は夜の山の中に居た。

少し肌寒く周囲には若葉が茂っている事から、もしここが日本な

ら季節は初春だろう。まだ少し痛みは残るが、ひとまず起き上がろうとすると、バランスを崩してしまった。怪訝に思いながら体を確認すると、可愛らしい子供の体が見えた。

「なっ！……………」

という驚愕の声も、二十年程前の自分ものだ。

様々な経験から、私は大抵の事では驚かなくなったと自負しているが、さすがにこれは予想の範囲外だった。

動転しながらも、自分に解析をかけてみると

身体年齢 七歳

魔術回路 正常稼働可能

無限の剣製 発動可能

魔術基盤の独占による使用魔術の強化を確認。

また、現在の感じている痛みは数分後には感じなくなる。

七歳！？まさか本当に二十年も若返っているとは……………

理由は間違いなくあの遠坂のうっかりに決まっている。孔が小さく等と言っていたから、体を縮めて無理矢理通したのだろう。それにこの痛みは恐らく体が縮む時の副作用見たいなものだろう。数分後には回復するらしいし、優菜も寝ているので、それまでは休んでいるとしよう。

そういえば、さっきは動揺していたので思い至らなかったが、こ



これが魔術の使えない世界である可能性もあつた訳だが、これは解析が使えたし、他の魔術も恐らく使えるだろう。とは言え、あまり樂觀するのにもよくないので、ひとまず自分の着る長袖シャツとズボンとを投影する。子供になつたせいで、今まで着ていた聖骸布の外套とプレートアーマーが着られなくなつてしまつたのだ。着られなくなつたそれらを入れるための鞆も投影してしまつておく。

その時、投影した物がいつもより遥かに上手く造れている事に気づいた。そういえば、さつき自身に解析を掛けた時に魔術基盤を独占したと言つていた。魔術基盤の独占ということは、この世界には魔術師はいないと思つて間違いないだろう。

これで懸念事項が一つ減つたが、逆に人間がいなくてという可能性もある。まあそれも山を下りてみればわかる事だ。

また、痛みが引いたら、まずは歩く練習をしなければならない。体が急に縮んだのでうまく体を動かせず、さつきバランスを崩したのもこの為だ。

それに、七歳の体ではまともに武器を扱えないので、それもどうにかしなければならぬ。体はこれから時間をかけて鍛えていくとして、当分は使用する武器を全て小型化し尚且つ軽量化して投影しなければならぬだろう。武器を本来の形から外して投影するのはより集中力や魔力を消費しなければならぬし、宝具や魔剣、聖剣の類はその神秘性を損なつてしまつが、使えないよりはずっとましだ。どの程度軽量化すべきか一度一通り試すべきだろう。

とは言え、今は痛みが引くまで休もう。そう考えた私は、優菜の頭を撫でながらこれからすべき事を頭の中で整理していった。

痛みが引いて、歩行練習もなんとか走られるまでになったところで、私は遠坂がくれた餞別の中身をまだ確認していなかった事に気づいた。

優菜を起こさないよう気を配りながらゆっくりと鞆を開けると、そこには大小様々な宝石と、古びた一冊の本があった。宝石の方は、魔力が入っている物としない物で別けられている。

本の方は、私がまだ遠坂と共にロンドンにいたころ、彼女が私に魔術を教える為に使っていた物だ。何のつもりで入れたのかはわからんが、これも彼女なりに必要になると思っ入れてくれたのだろう。そう思っ私は中身を全て鞆に戻した。

下山することにした私は、優菜を起こした。

子供の体力なので、鞆を持ちながら二つ年下とは言え人を背負っ山道を歩くのは流石に無理がある。

ただ、優菜を起こした時に「きみだあれ？」と聞かれてからの精神的ダメージからの回復と優菜に対する説明に時間を使いすぎてしまったため、今では日の出が見え始めている。

この山がどれほどの大きさかわからないが、なんとか再び日が暮れる迄に麓に到着したいと思っいたら、以外にもまだ日が昇り切らない内に下山して日本の住宅街の様な場所に到着することが出来た。住宅があるからには人間はいるのだろっし、町の様子から私達が居た世界と同程度の文明や科学力はあるらしい事が予想出来る。また、

道も汚い訳でもなければ、不自然に綺麗でもないので、特に治安が悪  
い訳でもなさそうだ。

「お家だ！」

と今にも走り出しそうな優菜を諫める。

「待て、優菜。町があるからといって、そこが安全であるという保  
障は無い。例えば、異常に排他的な文化を持っていたり、この時間  
ならまだチンピラが徘徊している可能性もある。ここは治安も良さ  
そうだから流石に住宅街にまでその類がいるとは思わんが、用心に  
越した事はない。それに、この世界で使われている言語や通貨等、  
私達はこの世界について何も知らないのだ。他にも調べなくてはな  
らない事柄は多い。多少時間をかけてでも、先ずはこの世界につい  
て学ぶべきだ。この文明レベルなら図書館があるだろうから、先ず  
はそこを探すことにしよう。」

「うん。わかった。」

一晩眠って大分落ち着いたようだが、まだ優菜の表情は固い。

この娘はまだ母親を失ったばかりなのだから私がしっかりして、危  
険が無い様にしてやらねば。

私は決意を新たに、町の探索を開始した。

数分後、私達は町の案内板の前にいた。

遠坂の事だから一体どんな奇天烈な世界に飛ばしてくれたのだろうと身構えていたら、なんと私の理解できる言語を扱う世界だった。

というか、ぶっちゃけ日本だった。

流石にこれは私としても予想外というか、拍子抜けだ。

いきなり私をこんな体にしてくれる様なうっかりをかましてくれたので、飛ばしてくれた世界もきつと実に私の常識から掛け離れた場所なのだろうと思っていたら、案内板には私の人生の半分以上の年月を慣れ親しんだ日本語が使われていた。書かれている地名は知らないものだが、もしここが私の知る通りの日本ならば、懸念事項は一気に少なくなる。

案内板には、風芽丘図書館という図書館の場所が書いてあったので先ずはそこに向かう事にした。

途中、朝食を摂るべきだと考えていると、前から老夫婦が歩いて来た。

「あら（やあ）、おはよう。」

「おはようございます。」

とりあえず挨拶を返す。

「こんな時間にどうしたんだい？」

おばあさんに尋ねられる。

「図書館に行くつもりなんです。ちょっと調べたいことがあるので。」

「

「図書館？風芽丘図書館ならまだ開いてないはずだがなあ。」

とおじいさんが教えてくれた。

「そうなんですか？じゃあ、図書館の開館時間とこの辺りで食事が出来る場所はありませんか？朝食を摂って時間を潰そうと思いますので。」

私がそう尋ねた瞬間、老夫婦の目が光った気がしたと思ったら、急に寒気がした。

「なら、私達と一緒にいかが？」

「今ちようど日課の散歩から帰る途中でな、わしらもこれから朝食を食うところなんじゃよ。」

「おばあちゃんのお味噌汁はとっても美味しいんだから。」

「そつえばこの前漬けたそろそろ漬物がそろそろ良い具合になるとるはずじゃ。」

「おじいさん、今の若い子達はそんなもの食べませんよ。」

そんな話をしながら強引に連れて行かれてしまった。

途中で遠慮しようと思ったら、

「少しで良いからこの古い先短く寂しい古いぼれ達の話し相手になつておくれ。」

等と言われたら断れなくなつてしまった。

老夫婦が大家をやっているというアパートに連れられて、玄米、魚味噌汁、漬物という純和風の朝食を頂いた。特に優菜は、玄米や漬物を見たことが無いらしく、不思議そうに食べていた。それを微笑ましく思いながら、自らも久しぶりの和食を楽しんでいると、

「ところで貴方達、この辺りの子じゃないでしょうか？何処から来たの？」

それまで料理の説明をしていた老婦人が質問してきた。

「あー、その……………」

と口ごもっている。

「そういえばさつきは気にしなかったが、お母さんはいるのか？この時間に君達のような子供二人だけという事はないじゃろ？」

今聞くくらいならさつき気づいてほしかった。

この非常に答えづらい質問に、私は悩んでいた。

きつと、親や家が無いことを話せばこの老夫婦は私達を助けてくれるだろう。彼等と出会って数時間しかたっていないが、彼等の人の良さは身に染みる程わかつたつもりだ。この老夫婦は今まであった好々爺とした追いはぎの類とは違うだろう。だが、だからといってそう簡単に彼等に頼っていいだろうか？ここは彼等の管理するアパ

トとの事だから、私達の事情の断片を話せば見返りがなくとも部屋の一つくらい貸してくれるに違いない。しかし、そこまでしてもらってはこれのお人よしの老夫婦に恩を返しきれなくなってしまふ。

どうしたものかと考えていると、優菜が志保の形見として持ってきた貴金属の一つを差し出してきた。

それだけで、私はこの娘の言わんとする事がわかった。この娘が私の考えている事を理解してくれたように。

「……………良いのか？」

「うん。まだ、幾つか残ってるし、写真も、あるから。」

ゆっくりと、しかしはつきりと彼女は答えた。

「わかった。」

私は老夫婦に今は親が居ない事、帰る家も無い事、自分達は血が繋がっていない事等を話した。そして最後に、ここに住まわせてもらうお礼に、優菜の母である志保の形見をもらって欲しいと頼んだ。ただ、何処でどう間違えたのか最終的に、

「私達をここに住まわせたくばこれを受け取れ。」

「くっ、そんな……………」

「お兄ちゃん、そんなに押し付けなくても……………」

「ばあさん、ここまで言うんだからもらってやるっ。」

……どうしてこうなった。

結局、私が老夫婦を脅す形で、志保の形見を押し付けてアパートに住まわせてもらう事になった。優菜はとても複雑そうな顔をしていたが気にしない。

そんな事をしているうちに、図書館の開館時間になったので、私達は図書館に向かった。

優菜は最初、老夫婦が見ていってくれると申し出てくれたが、

「お兄ちゃんと一緒にいい。」

と言っついで来た。

ちよつと嬉しかったのは秘密だ。

図書館に着いた私達は早速この世界の事について調べ始めた。しかしこの世界は本当に前の世界とそっくりな様で、調べた限りではいくつかの地名や、地形が変わっている程度で、後はだいたい私の記憶と相違は無い。ただ、冬木が無くなっていたのはやはり悲しかった。無論、この世界に来る前から覚悟はしていたが、ここまで似ているならばもはや、と期待してしまつた分余計に落胆も大きくなる。ちなみに、優菜はここまで歩くのに疲れてしまつたらしく、椅子に座つて大人しくしている。ありがたい事にはありがたいのだが、前までは活発で明るい娘だったので、こんなにも静かだと逆に心配になつてしまう。

言うなれば、うっかりしないあかいあくまの様なものだ。何？まだ小さくなつた事を根に持っているのか、だと？当然だ。そのせいでこちらは戦闘もままならない状態にされてしまつたのだから。

「優菜、ただ待っているだけというの暇だろう。これでも読んで



いたらどうかね。」

そうやって私は彼女でも読めそうな本を一冊取り出して、

「いない。」

ゆっくりと元の場所に戻したのだった。

## 第0話 許し・戸惑いの異世界（後書き）

自分でストーリーを考えるの難しい！

ということから次からプロローグより先の話しに行っちゃいます。  
ちなみに作者は書き溜めとかないので、リクエストがあれば出来る限り受け付けます。

例：淫獣ユーノフラグを立ててユーノにあんなお仕置きをして！  
とか、フェイトちゃん萌え！ということだと士郎とフェイトでこんな事させて！

てな具合でお願いします。

ではでは

## 第1話 時は流れて(前書き)

どうにか読みやすくならないかと、試行錯誤しているので、できれば書き方についてもアドバイスを頂ければ嬉しいです。

## 第1話 時は流れて

私と優菜がこの世界に来て速くも二年が過ぎた。

そして今日、私は……………

「皆さん、おはようございます！」

「…………オハヨーゴザイマス…………！」

小学三年生になった。

人間の適応力とはすごいもので、最初は恥ずかしかったこの大きな声での挨拶も、二年もすれば慣れてしまった。

事の始まりは二年前。

私達があの老夫婦　桂夫妻の管理するアパートに住み始めてから少し落ち着いた頃だ。

私達が学校に行っていない事を桂夫妻が知ってしまったのだ。

そんな事ではいけないと強引且つ迅速に入学させられたのがこの、私立聖祥大附属小学校だ。

何でも、ここの理事長は以前この老夫婦にお世話になったとかで、もう入学募集を締め切っていたにも関わらず入学試験を受けさせてもらった（名門私立小学校なので入学試験がある）。

私としては、今更小学校で学ぶ事も無いので遠慮したい所だが、私の事情を話す訳にもいかないなので仕方なく受験することにした。

受けさせてもらう以上は手を抜いてわざと落ちるのは桂夫妻に失礼にあたるし、何より小学校の入学試験に落ちるのはあまりに恥ずかしい。

別に誰も私を責めたり、笑ったりしないだろうが、二十代後半にもなって小学生の問題を間違えるのは私の沽券に関わる。

そう考えていたらいつの間にか全ての問題に正解してしまっていた。ちなみに、優菜も強制的に近くの保育園に入園させられた。

こっちに来てしばらくはふさぎ込んでしまい、ろくに食事もとらずに部屋の隅で丸まっていたので当時は心配していたが、保育園に通い初めて同年代の子供達と遊ぶようになったからか、この頃から少しずつ以前の様な明朗な性格に戻って行った。

今ではすっかり元の、こちらに来る前と同じ笑顔を見せる様になって、安心している。

こればかりはこの保育園を紹介して、お金まで出してくれた桂夫妻に感謝してもしきれない。

お金と言えば、流石に何かから何まで桂夫妻にお世話になる訳にはいかないの、私はとあるバイトを始めた。

そのバイトとは

「土郎君。お母さんがこの前はシフト入ってないのに手伝ってくれて

ありがとうって言ってたよ。」

この茶髪をツインテールにした、将来はきっと美人になる事を確信させる可愛らしい美少女　高町なのはのご両親が経営している洋菓子喫茶　喫茶翠屋で働かせてもらっている。

「そうか。ありがとう、なのは。それと、桃子さんに、新しいケーキのレシピを考えたついたら今度のバイトの時に実物を持って行くと伝えておいてくれ。」

「うん。わかった。それで、そのお……………」

元気に返事をしたかと思えば、急に恥ずかし気にもじもじし始めたなのは。

毎度の事なので、理由はわかっている。

「心配しなくともちゃんとなのは達の分も持つていくから安心しろ。勿論、そこでコソコソと立ち聞きしている二人も食べるのだから？」

問い掛けると、驚いた様に体を震わせる二人の人影。

「何よ！別にコソコソと立ち聞き何てしてないわよ！ただちよつと離れたところで話を聞いてただけじゃない！」

どこぞのあくまの様に吠える、西洋人の血を引いている事を主張するきらびやかな金髪に、凜とした雰囲気から、なのはとはまた別の種類の美女になることを予測させるこの美少女　アリサ・バニングス。

彼女をもう一人の立ち聞きの下手人である、紫の髪にカチューシャをしたアリサとは正反対のおっとりとした雰囲気を持つ美少女

月村すずかが宥め……………

「アリサちゃん、それを立ち聞きって言うんじゃないかなあ。」  
「  
る訳では無い様だ。」

「何よ！それならすずかも同罪でしょ！」

言い返すアリサだが、

「アリサ、それでは自分も立ち聞きをしていたと認めるのだな。」

「えっ？……………あつ、いや、そうじゃなくて……………ああ、もう！なのは！あんたのせいよ！」

「ええ〜！？なんで〜！？」

としどろもどろになりながら弁解にならない弁解をするアリサ。

それを見て笑う私達にアリサが逆ギレして、何故かその矛先はなのはに向かう。

それを見ながら私とすずかでまた笑いあう。

それが今の私の日常だった。

彼女達に出会ったのは、私がこの学校に入学してすぐの時だ。

私は魔力と良く似たエネルギーをなのはから感じたので、こっそり後をつけていた。

当然、この時はまだなのはの事は知らなかったため、彼女がこの世界独特の魔術師の家系の者で、わざわざ膨大な量の魔力を振り撒いてこちらから接触するよう誘っているのかと警戒していたが、それにしては不可解な行動を彼女がとったのだ。

その時、この三人が喧嘩を始めたのだ。

カチューシャをアリサに奪われて泣くすずか。

それを諫めるなのは。

なのはに逆ギレして喧嘩を始めるアリサ。

それをやめさせる為に急に叫ぶすずか。

三人ともそこで動かなくなってしまったので、私がたまたま通りかかった風をよそおって、茫然とするアリサとなのは、怒れるすずかを宥めながら三人の話を聞いて、全員を仲直りさせたのがこの関係の始まりだ（ちなみになのはは、ご両親からは魔力を感じなかったため、たまたま膨大な魔力の様な物を持ってしまった一般人のようだ）。

それ以来、私達は仲良し四人組として校内で有名になった。



ちなみに、有名になった理由のほとんどはなのは達の容姿が原因で、後は私が前の世界の高校時代の様に壊れた電化製品を直したりと便利屋紛いの事をやっているうちに『聖祥のブラウニー』という不名誉なあだ名をつけられてしまったからである。

また、私達四人組を指す時は『聖祥に住むの四匹の妖精達』（フォーフェアリーズ）と呼ばれ、いつの間にかこの聖祥に『妖精達の花畑』（フェアリーズガーデン）というファンクラブまで出来ていて（所詮は小学生の考えた事なので、ネーミングセンスについては触れないで置く）、私達四人を不可侵の存在とするという不文律があるらしい。

まあ、私の場合はいつもなのは達と一緒にいることと、ブラウニーが妖精の一種であることから、とりあえず入っているだけだろう。何せファンクラブのなかには、なのは・アリサ・すずかの三人を女神と崇め敬う集団もいる程で、その中には中等部や、一部高等部の生徒もいるらしい。

……大丈夫か聖祥。

とは言え、ファンクラブが作った不文律は私にとってはとてもありがたい物だ。

この不文律が無ければ、私は毎日学校中を会員達と鬼ごっこして回る事になっている事だろう。

事実、一度その様な事態に陥った事がある。

それはファンクラブが結成してすぐの頃。

当ても、今程では無いがかなりの人数が所属していたファンクラブの会員達が結託して、私になのは達から手を引く様に迫って来たのだ。

今でこそ効率的なトレーニングと、度々行った体が壊れる寸前の無茶な修業のおかげで小学生ではありえない身体能力を有しているが、当時はまだ年齢の割には体力がある程度だったので、一部の女子の手助けも虚しくすぐに捕まってしまった。

そして、魔女裁判よろしく築刑にされていた所を、なのはの、

「士郎君をいじめちゃダメなの！」

という可愛らしい怒りの声や、

「あんた達下級生一人相手に寄ってたかって恥ずかしくないの!？」

という幼くも迫力十分のアリサの叫びや、

「あ…あの……やめてください。」

というすずかの涙目になりながらの訴えにより何とか救出された。

それ以来彼等も学習したらしく、あの三人に嫌われない様にするため、不文律の対象に私も含めたらしい。

ある日、私達四人と、今年から一年生として入学した優菜が昼休みに屋上で弁当を食べていると、アリサが一時間目の国語の将来の夢という作文について話を振って来た。

「将来か、アリサちゃんとずかちゃんはだいたい決まっているんだよね？」

「そうね。私はお父さんもお母さんも会社経営だからいっぱい勉強して跡を継がなくてはならないね。」

「私は機械系が好きだから、工学系の専門職なんかがいいんじゃないかなって思ってるよ。」

「なのはやっぱり喫茶翠屋の二代目？」

「うーん、確かにそれも将来のビジョンの一つだと思う。私、特技や取柄っていう突出したものがないし・・・」

「バカチン！自分でそういうことは言わないの！！」

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ないこときつとあるよ！」

「だいたい、理数系科目で私と同じくらい取ってるのに特技や取柄がないってどういう事よ！」

「にゃ、いや、それは………あ、そ、そういえば、士郎君と優菜ちゃんは何か将来の夢ってあるの？」

アリサが「逃げたわね。」と言わんばかりに睨んでいるが、何とか話題を自分の事から逸らしたなのは。

変わり身に使われた優菜は

「私はお兄ちゃんのお嫁さんになる〜」

即答した。

あまりの嬉しさにしばし感動していると、

「あら〜？よかったわね士郎〜。もう将来の結婚相手が見つかったみたいよ？」

アリサがからかおうとしてきた。

だが、あえてアリサを無視して優菜に話しかける。

「ありがとう。優菜。それはとても光栄だが、非常に残念な事に日本では兄妹は結婚出来ないのだよ。」

「え〜。」と優菜が心底残念そうな声を出す、こればかりはどうしようも無い。

「じゃあ士郎君は？」

「ふむ。将来の夢か……少し前までは明確にこれと言える物があったのだがな。今は精々『幸せになる事』や『優菜を幸せにする事』といった曖昧な物しか無いな。」

何故か一瞬、気まずそうに全員が沈黙した後、アリサがつまらなそうに口を開いた。

「何て言うか、平凡過ぎて面白味に欠ける夢ね。」

「アリサちゃんダメだよ。人の夢にそんなこと言っちゃ。」

「だってホントの事じゃない。」

「もっ……………」

なのはがむくれたが、本気で怒っている訳ではなさそう。良くわからないが、これがアリサなりの気遣いなのだと理解した。

「そうだ！あんた翠屋で働いてるんだから、なのはと結婚して一緒に翠屋継いじやいなさいよ。」

アリサが再び私となのはをからかおうとする。

「にやにや！？にやにやに言ってるのアリサちゃん！？」

「そうだ。冗談でもあまりそういう事は言わない方がいい。私は気にしないが、私の様な者と一緒にされてはなのはが迷惑だろ？」

そういうと、優菜が騒ぎ、アリサが睨み、なのはが拗ね、すずかは困った様な微笑みを浮かべた。

なんでぞ……………

sideアリサ

昼休み、あたし達は国語の将来の夢の作文について話していた。

「じゃあ士郎君は？」

さすがが士郎に尋ねる。

実は密かにコイツの夢は気になっていた。

コイツは、普段は妙に大人ぶってるのに、たまに優菜ちゃんと同じ年何じゃないかと思う程幼く見えたりして良くわからない部分が多い。

だから一番予想がつかなくて面白そうな答えを言いそうな気がするのだ。

「ふむ。将来の夢か……少し前までは明確にこれと言える物があったのだがな。今は精々『自分が幸せになる事』や『優菜を幸せにする事』といった曖昧な物しか無いな。」

少し考えた後、私の唯一の男友達はそう言った。

しかし、幸せなんて言葉を使いながらも、その顔はまるで遊園地で迷った子供の様だった。

特に、『自分が幸せになる事』と言った時の士郎の顔は、今から大罪を犯そうとしているかの様な人間の顔だった。

皆もそれを感じ取ったのか、一瞬誰の声もしなくなる。

皆どう反応していいかわからないのだろう。

だから私は

「何て言うか、平凡過ぎて面白味に欠ける夢ね」

またいつもの様に会話を続ける。

これはきつと、私達が簡単に立ち入っていい話ではない。

私は向こうから話してくれるまでは何も聞かずにただこの莫伽を茶化しておく事にした。

そしてなのはが私に続いて、会話を続行した。

アイツは、自分がどんな顔をしていたのか気づいていない様で、不思議そうな顔をしながら話を続けた。

今度コイツに何か面白い事をさせようと心に決めて、私はその後何事もなくその日の放課後を迎えた。

s i d e o u t

## 第1話 時は流れて（後書き）

実質五話目にしてようやく本編突入です。

ちなみに、ファンクラブについては、また外伝の様な形で話を書くつもりなので、こんな事細かに書きました。こちらもリクエストと同じく、もうしばらくして落ち着いたら書きますので、しばらくお待ち下さい。

後、桂夫妻のキャラ設定を書きましたが見ても本編とは関係無いので、興味のある人はご覧下さい。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5019x/>

---

魔法少女リリカルなのはSword

2011年10月25日02時02分発行